

《資 料》

アメリカ西北部日本人移民労働運動の先駆者、
佐々木勝成に関する新資料黒 川 勝 利
(岡山大学名誉教授)

解説

(1) 佐々木勝成はシアトルを中心とするアメリカ合衆国西北部における日本人移民労働運動のパイオニアであった。1906年頃に阿部豊治などとともにシアトルにおいて「日本人労働組合」を設立し、その機関誌として『同胞』を発行した。設立直後の1907年にワシントン州のバーリングラムにおいて排日の機運が高まった時、佐々木は同地に赴いて当時排日運動の中心勢力であった労働組合の集会で講演し、シアトルにおける日本人労働者、労働組合の状況を説明して理解を求めるとともに、日本人労働者、アメリカ人労働者間の連帯を力説している。

この組合は佐々木たちが期待していたようには発展することができず、『同胞』も数号で途絶した。しかし佐々木は、1915年に再度「日本人労働組合」を結成した。

その際彼は、かつて対立していた東洋貿易会社社長高橋徹夫を会長に迎え、自らは常任幹事に就任している。

高橋の他にも多数のシアトル日本人実業界の有力者が後押ししていたこの新たな「日本人労働組合」を本来の労働組合とは言いがたい。しかしこの組合が様々な手段、たとえばアメリカ人労働者がストライキに突入した時の支持表明、労働災害の際の遺族への見舞、選挙の際の労働組合が支持する候補者への寄付などによって、日本人労働者とアメリカ人労働者の連帯を模索していたことは、当時の多くの資料によって明らかとなっている。アメリカ人労働者の多くが日本人移民を、低賃金を武器として自分たちの職を奪う厄介者と考え、ほとんどの労働組合が日本人の加入を拒否していたこの時代においては、これもまた「日本人労働組合」と名乗る組織の重要な課題であったに違いない。

佐々木は「日本人労働組合」の結成以来シアトル日系社会の、有力者とは言えないまでも著名人であり、彼と「日本人労働組合」の活動の軌跡は当時シアトルで発行されていた邦字紙『大北日報』、シアトルにおける労働運動の要だった中央労働評議会の機関紙『シアトル・ユニオン・レコード』*Seattle Union Record*、あるいはワシントン大学図書館に所蔵されている日本人移民や労働運動関係文書の各所に残っている¹。

しかしながら、「日本人労働組合」設立以前の佐々木勝成の経歴、さらに彼は1920年代の前半に突然帰国してアメリカにおけるその活動を終えるのであるが、その帰国の理由、日本における彼のその後の活動について、私はほとんど知ることがなかった。『大北日報』の記事によって僅かに、1925年当時彼が東京市芝区小山町に住み、かつてシアトルに住んでいた人々と結成した「シアトル会」という団体に加入していたこと、また1929年に『大北日報』社主竹内幸次郎が帰朝した折の同会の歓迎会に彼も出席していたことが確認できたのみであった²。

ところが、岡山大学を退職後に私は、佐々木勝成の孫にあたる今泉治子様から連絡をいただいた。私の著書、論文で祖父の活動が紹介されていることを知って興味を持たれたのである。また治子様の次女順子様とその夫君ジャック・ホワイト氏が曾祖父佐々木勝成の活動に興味を抱いて研究を開始されていることを知った³。さらに最近になって、今泉氏の従兄弟にあたる多田力氏より佐々木勝成関連の資料

数点のコピーを送っていただいた。

その中に、邦文タイプライターで作成された昭和9年10月付けの佐々木勝成の履歴書の草稿が含まれていた。多田氏によれば、佐々木が保険代理店を経営しようとした際に会社に提出した履歴書の草稿らしい。履歴書であるから当然のことながら彼の渡米前、アメリカ滞在中、帰国後の活動が簡潔にまとめられている。本稿で資料として紹介するのはこの草稿である。

一部に小さく手書きで付記、修正が書き込まれていたが、残念ながらそのほとんどは判読できなかった。判読できたごく一部だけをそれに沿って修正した。原文は縦書きであるが紹介にあたってはこの掲載誌の他の記事にならって横書きに改めている。

(2) それではこの資料によってどのような新しい知見が得られるであろうか。

まず佐々木の渡米前の履歴については、彼の学歴、職歴に加えて、今まで不明であった渡米の経緯が判明した。

佐々木のアメリカ滞在中の活動については、「日本人労働組合」がシアトル本部の外、ポートランドをはじめとする西北部の各地に35の支部を置いていたという記述が目につく。「日本人労働組合」に関して、「700人」、あるいは「600人」という組合員数に関する記述は残っているが、支部の存在とその数に関する記述は、私の知る限りでは発見されていないからである。

なお、「日本人労働組合」の設立が「履歴書」では大正11年、すなわち1907年1月と記されている。しかし、カール・ヨネダ『在米日本人労働者の歴史』によれば、佐々木とともに「日本人労働組合」を創設した阿部豊治は、後の回想的記事の中で創設を1906年と述べている。いずれが正しいか、判断に迷うところである⁴。

意外だったのは佐々木の日本帰国の理由と帰国後の活動である。

彼は1922年5月に日本に帰国した。私はその理由を彼が「日本人労働組合」の将来に希望を見いだすことができなくなったからであろうと考えていたのであるが⁵、履歴書には、ラジオ放送の日本での創業という野心が理由であったということが明示されている。

帰国後の佐々木とラジオ放送との関係についても私はまったく知らなかったが、多田力氏から、かつて「Radiofly Wiki」というラジオ放送に関するインターネットサイトが存在していたこと、そのサイトでは「放送史上の人物」の一人として佐々木の義弟である本堂平四郎の経歴が詳しく紹介されていたことを教えられた。多田氏はそれをコピーして保存しておられたが、その中には本堂平四郎と佐々木勝成とが協力してラジオの実験や東洋ラジオの設立にあたった事実が述べられていた⁶。また今泉治子氏によると、勝成の姉テル（照子）の長女で勝成の養女となったご母堂は生前、佐々木がアメリカからラジオを持って帰国し、その後義弟宅との間で開通させるとともに東洋ラジオという会社を設立した、しかし種々の困難のためにその権利を日本放送協会（NHK）に譲ることを余儀なくされた、と語っておられたそうである⁷。これらを考え合わせると、履歴書や後に述べる推薦状に描かれている佐々木のラジオ放送関連の活動は、義弟である本堂平四郎との共同作業であったと考えて差し支えないように思われる⁸。

(3) 送られてきた中にもう一点、佐々木の活動について詳しく記述している資料があった。第二次世界大戦後第1回の総選挙に佐々木が東京都第一区から立候補した⁹際の推薦状で、タイトルは「推薦状 在米十七年間 愛國の新人 佐々木勝成君」、執筆者は「在紀州長島天命学院本部代表濱口三郎」と記されている。文書の日付は昭和21年3月21日であり、本文97行と追記部分の14行から成っている。これもまた興味深い文書であったが、私は濱口三郎氏のこの推薦状執筆後の状況、したがってまたこの文書の著作権に関する情報を入手できなかった。それゆえ本稿では、この推薦状については原文の掲載

は控え、以下その内容を簡単に紹介するにとどめておく。なお濱口三郎氏は佐々木とアメリカにおいて親交を結びその活動を高く評価していた濱口熊岳の弟子であり、濱口熊岳が昭和19年12月10日に死去したので、代わって濱口三郎氏が推薦状を執筆したとされている。

文書の本文は、濱口熊岳と佐々木のアメリカにおける接触、その後の親交から始めて佐々木の渡米前、米国滞在中及び帰国後の活動を紹介し、さらには終戦直後の日本の政情を概観して「此際宜シク正義ノ士佐々木勝成氏ヲ一致協力シテ議會人タラシメ、依テ以テ我ガ日本ノ國家再建ニ献身奮闘ヲ求メル事ガ現在我等ノ負フ使命ナリト確信シ即チ茲ニ氏ノ人トナリヲ紹介シ併セテ亡恩師熊岳先生ノ思念モ含メ謹ンデ推薦スル次第デアル」と佐々木への投票を勧めている。

佐々木の活動歴を紹介している部分の大きな流れは履歴書とほぼ同様であるが、特に渡米前の活動とラジオとの関係において、履歴書には見られない事実が語られている。選挙時の推薦状という性格から、文書のどこを見ても佐々木の活躍が強調されているのが特徴で、特にラジオについては、その知識や機械を最初に日本に輸入したもの、最初に宣伝普及し実験したもの、さらにはラジオ放送所設置の最先出願者も佐々木勝成であったが「逡信官僚ト政客、財閥、利権屋」の妨害のために挫折した、と述べている。

アメリカ滞在中の労働運動との関わりについては、本文においても若干は言及されているが、むしろ追記において具体的かつ詳細である。4項目にわたって紹介されているが、ワシントン州ダーリントンで発生した排日の際に佐々木が、「林久二郎領事」の依頼を受けて単身現地に赴き、放逐された日本人労働者20名を連れ帰ったという第3項の記述が私には特に興味深く思えた。この事件については竹内幸次郎の『米国西北部日本移民史』にも記述されているが、そこではシアトルから「林領事館補」が同地に出張して実情を調査したとあり、佐々木の活動については記されていない¹⁰。

資料 佐々木勝成履歴書

履 歴 書

本 籍 東京市芝區西久保櫻川町四番地

現住所 東京市芝區三田小山町廿五番地

戸主 士族 佐々木勝成

明治拾貳年六月貳拾八日生

學事及職業

一、明治参拾五年七月 明治大學ヲ卒業ス

一、明治参拾七年貳月拾壹日 日刊新聞報知社ニ政治部記者トシテ入社

全参拾九年四月「米国桑港」大震火災實地調査ノ社務ヲ背ヒテ渡米シ用務完了後全年拾壹月辭職ス

一、明治四拾年壹月 排日ノ氣聲阻止ノ目的ヲ以テ在米同胞ヲ糾合シ米國政廳認許ノ「日本人労働組合」ヲ組織シ其ノ本部ヲワシントン州シヤトル市ニ又支部ヲオレゴン州ポートランド市外三十五ヶ所ニ設置シ専ラ米國労働組合トノ融和ニ努ム

一、大正拾壹年五月 無線電話放送局設置ノ目的ヲ懷キ歸朝セシモ通信大臣ハ願意ヲ保留シ單ニ實驗ノ許可ヲ與ヘリ（全年九月一日附）而シテ呼出番號

「東京五番」及「東京六番」ヲ附與セリ

- 一、大正拾壹年拾月 東京市ニ東洋レヂオ株式會社ヲ創立シ常務取締役タリシモ全拾貳年九月壹日ノ大震火災ニ工場等悉ク焼失シ全年壹月總會決議ニヨリ解散ス
- 一、大正拾參年八月 曩キニ出願セシ無線電話放送局設置ニ關シテ通信大臣ハ他出願者と合同スヘキヲ命ス依テ出願者貳拾ハケ團體ヲ基礎トシ社團法人東京放送局ヲ組織セリ現在ノ日本放送局は其後進ナリトス

賞罰

- 一、明治大學ハ其在學中貳學年及ヒ參學年ノ月謝ヲ特免セリ
- 一、社團法人東京放送局は貳個ノ記念品ヲ兩度ニ贈與セリ

以上

右之通りニ相違無御座候也

昭和九年拾月 日

右 佐々木 勝成

注

本稿執筆にあたっては今泉治子様、多田力様に大変お世話になりました。謹んで感謝の意を表します。

1. さしあたり、拙著『アメリカ労働運動と日本人移民——シアトルにおける排斥と連帯』（大学教育出版、1998年）及び、拙稿「20世紀初頭の合衆国北西部における日本人労働運動」（『岡山大学経済学会雑誌』第34巻第4号、2003年）を参照されたい。なお、前掲『アメリカ労働運動と日本人移民』29頁で私は第2期の「日本人労働組合」の結成を1914年と誤記している。1915年が正しい。
2. 『大北日報』1925年1月30日及び1929年1月5日号を参照。
3. ご夫妻はすでに、家族資料の他、合衆国国勢調査、乗船名簿、*Seattle Times*等を用いたJunko and Jack White, *Great-Grandfather Katsunari Sasaki in America*, November 5, 2013を執筆されている。シアトル在住のお二人の今後の研究を期待したい。なお、ジャック・ホワイト氏は、今泉氏から送っていただいた論文から推察するに本来は科学史の研究者のように思われる。Jack R. White, "Hershel and the Puzzle of Infrared: An astronomer took a mental leap to first connect light and heat", *American Scientist*, 100-3 (May-June 2012) 参照。
4. カール・ヨネダ『在米日本人労働者の歴史』新日本出版社、1967年、43-44頁、参照。
5. 私にそう感じさせたのは『大北日報』の1919年、1920年の元旦号である。いずれも当時のシアトルの著名人を取り上げて批評しているのだが、1919年には、佐々木勝成の長所として「談論風発、兎も角も正義を盾」、短所として「労働組合の幹部に使用主側の巨頭を頂く、少年と女の涙にもろし」と書いている。また1920年の記事は、取り上げた人物を過去派、現在派、未来派に分類しているが、佐々木は過去派とされ、「生命の組合を棄て、観光と洒落る」と揶揄されている。いずれも彼と「日本人労働組合」が本来目指したような路線を追求できないでいる状況を示しているように私には思えたのである。なお、前掲『アメリカ労働運動と日本人移民』で私は、これらの記事の紹介に続いて、翌1921年にシアトル日本人社会で発生した事件において『大北日報』社主で『米国西北部日本移民史』の著者でもある竹内幸次郎と佐々木が激しく対立したことを記し、「『米国西北部日本移民史』が労働問題にかなりの頁を割きながら、佐々木勝成の功績に言及することが少ないのは、あるいはこの事件における竹内と佐々木の対立と関係があるのかも知れない」と書いている。今思えばこの推測は軽率であった。竹内幸次郎はそんな器の小さい男ではない。ここで訂正しておきたい。
6. 末尾近くに（執筆中：佐藤淳）と記されていることから、本堂平四郎に関する記述の筆者は佐藤淳氏であることが明らかであるが、「Radiofly Wiki」全体の筆者が同氏であるか否かは私には不明である。なお、「Radiofly Wiki」はインターネットから削除されたようであるが、本堂平四郎とラジオ放送の関係について言及したサイトは2016年8月現在もインターネット上に散見される。
7. 今泉治子氏の筆者宛2013年11月5日付書簡による。
8. 大正11年8月22日付『官報』第3008号によれば、東京5番及び6番の施設者は東京市麹町区白酔堂の本堂平四郎である。本堂平四郎は佐々木の妹ソノ（園子）の夫であるから親族関係としては佐々木の「義弟」であるが、1870年生まれで、1879年生まれの佐々木よりも9歳年長であり、さらには東京各地の警察署長を務め、特に赤坂警察署長時代に拘摸の大物

として有名であった仕立屋銀次を逮捕したことで広く名を知られていた。1919年に麹町署長を辞して実業界に入っている。他方佐々木は若くして渡米しており、アメリカ西北部でこそ著名人であったが日本では無名に等しく、官界、実業界の人脈も乏しかったと思われる。それゆえ、ラジオ事業がこの義理の兄弟二人の共同事業であったならば、公的、対外的には本堂平四郎が代表者となるのが自然だったと思われる。以上、多田力氏所蔵の「Radiofly Wiki」のコピーの他、『讀賣新聞』1909年7月9日、『東京朝日新聞』1919年6月14日を参照した。またWikipediaでは「アマチュア無線」の項に「本堂平四郎（東京五番・六番）に私設無線電話施設が許可された」という記述がある。

9. この選挙について今泉治子氏は、「在米の昔からの方達」からの支援を受けて「祖父も止むなく立候補致しましたが国内でのバックもなく当然のように落選致しました」と書いておられる（今泉氏の筆者宛2013年11月5日付書簡による）。佐々木の人生で周囲の人々からもっとも注目され評価されたのはやはり在米中の「日本人労働組合」指導者としての活動であったと思われる。なお多田力氏にいただいた資料中の戸籍謄本コピーによれば佐々木は1956年7月28日に東京都港区で死去している。

10. 竹内幸次郎『米国西北部日本移民史』159頁、参照。